
ニルレイ

ヒュウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ニルレイ

【NZコード】

N1521H

【作者名】

ヒュウ

【あらすじ】

その日から『人間』は希少種になった。

序章 山奥に住む老人の話

……お主の問いに答えるのは、こせかわしには難儀なことだ。思い出したくない」と思ひ出させぬ。…………が、まあよい。わしの場合を話してやる。おぬしにはじつてもうりつた上で聞きたいことがある。

わしはとある小さな街の大工をしておつた。妻子もいてな、妻はわしにはすぎた美しいやつで、子の一人もわしには似ず頭がよくて、自慢の子たちだつた。その街は発展途上でな、これからといつときだつた。そのため仕事の依頼がわんさかあつて、毎日が忙しくも楽しかつた。あのころは本当に、良かつた。

だがそこへ、まさに幸福を謳歌しているとき……。忽々しくもやつらが突然にやつてきた。

やういえばお主はやつらを見たことがあるのか？

……そうか、あるか。ではわかるだらう、あいつらの恐ろしさが。今でもわしの脳裏にはやつらの姿形がはつきりこびりついていふよ。

どりどりとした透明な液体が、人ほどの大きさで、地面をなめるよに進むあの姿を。巷ではラギアス地方の民話の悪戯な水の精靈

の名をもじって、アーブスといつそうじやないか。だがわしにはなぜがやつらをそり呼ぶのかわからん。あれは恐ろしく凶悪なものだ。民話のような人々をからかうよつた生易しいものでは断じて違う！

……すまない、つい感情的になつたしました。お主にひとつはどつでもいいことだな。どこまでわしは話したんだ？…………あ、やつらが襲つてくるところか。

一番最初にやつらを見たのは、ほかならぬわしだった。その時ちよつど物見用の櫓を外壁の上で大工仲間の連中と作つておつたからな。街の誰より高いところにいた。日光を遮る雲が一つもない快晴のなか仕事に勤しんでいると、視界の隅で何かが光つた。そちらを向くと、地平線上に太陽の日差しを反射させ何かが何百何千とそれこそ大量に押し寄せてきた。ものすごい勢いでな。それがやつら、この名でいうのは抵抗があるがアーブスだつた。

やがて他の大工仲間も気付き、まだ遠くのため、不明瞭な正体に戸惑いと不安にはなりにはしたものの急いで門兵に報告し、門兵はそれをどこかの国の軍勢であろうと推測して、街の門全てを閉じて、やつらを迎え打つ準備をした。わしはなぜだろうな…………好奇心混じりにその光景を見たくなつて建設中の櫓で眺めていた。

やつらがすぐそこまで来て、姿形がはつきりわかつたとき、わしを含め見た者全員に恐怖に包まれ、混乱におちいった。お主も始めてみたときそうであつただろ？

動搖が隠せないままの戦いになつたが、わしら人間はやつらには全くの無力だつた。矢がその身を貫き、投石が原型すら留めず潰しても……やつらは再生し、些細な傷すらつけられなかつた。

そしてやつらは自由自在に変えられる能力を利用して、門扉の隙間から街のなかへ次々と侵入した。そのあとはもう阿鼻叫喚だ。

人間一人に対し一匹ずつやつらは襲い、その透明な体に人を取り込んだ。そうなるとやつらは急に白くなり、まるで石像のようになるものだから、中がどうなつているのか見当がつかず、それがなおさらわしを恐怖に突き落とした。

その光景が辺りでおきていながらも、わしは櫓から下り家族の安否が心配で懸命に家族の元にむかつた。家族と合流すると、せめてこいつらだけはと思つたんだが……何ができたというわけでもなく、呆氣なくわしらはやつらに飲み込まれてしまつた。はちみつのようなべたべたした液体に飛び込むような不快さを感じた瞬間わしは意識を失つた。

気付いたときは、わしは倒れていた。どこも痛みはなく、普通のようによく見えた。立ち上がり辺りを見回しても、家族や街の人らがいてもやつらはいない。しかも家族もただ氣をうしなつてゐるだけらしかつた。危機は突然やつてきて、そして去つていつたのだ。わしはそう思い、安堵のため息をついた矢先、いい様のない悪寒が体を駆け巡つた。

何かわしの中に巣くつている。確証のないあやふやな感覚にもかかわらず、なぜかはつきりとわしにそう意識させた。そしてそのあやふやな感覚はわし以外の家族や街の人々の中にも何かが体内にいると知らせた。……どうしようもなく恐怖だった。気が狂いそうになつた。

その場に居たたまれなくなつたわしは、はじかれるように逃げた。当てもなく、ただ夢中で。恐怖を振り切るようにな。

そしてようやく足をとめたのが、こんなへんぴな森の奥だ。人と隔絶しよつとした結果だつた。おぬしのような旅人が本当にまれにおとずれることがある。ついでにいうとお主は五人目の訪問者だ。奇遇なことにその五人とも「人間」だつた。だから会うことができたのだろうな。視認しなくても取りかれている者が近くにいると心臓をわしづかみされている気分になるからな。

わしは一生をここで終えるだろ。街には一度ともどるつもりはない。家族のことはもちろん心配している。だがわしは恐いんだ。己の内に巣くう一匹のものにすらびくびくしているわしだからな。家族とあつたとき本当におそろしい。

これは拒絶反応というやつらしいな。三人目の旅人から聞いた。わしとわしの中に寄生してアーブスとが極端に相性が悪く、反発しあい、他のアーブスの存在がそのことをさらに悪化させる、と。稀な例とも聞いた。大半な寄生された人は何事もなかつたように普通の生活を続いているわけだ。……普通にな。相性の良いものは特殊能力や強靭な肉体、素晴らしい英知が発現するので、寄生されてよ

かつたという理解できない声もあるらしいな。嘆かわしいことだ。

これでわしの話はおわりだ。すまなかつたな。つい長話になってしまった。許してくれ。で、どうだ参考にはなつたか。

……そうか、それは良かつた。わしも話したかいがある。ではかわりといつてはなんだが、一つ質問をいいか。あの日世界中の人々がやつらに寄生され、されてない人間のほうがわずかになつてしまつた。その世界を見て、お主はどう感じる？

「人間」の旅人よ。

序章 山奥に住む老人の話（後書き）

モバゲーで書き始めた小説なのですが、ここでも見てもらいたいな
と思って投稿しました。

読んでいただいた方、ありがとうございます。

それにもなつて諸都合で更新が止まっていた筆者の別の作品も再
開したいと思います。

第1章 人間の旅人1

大陸南部にある街ホネド。

このホネドを間にはさんで、大陸中部からの商品が南部に流れ込んでいき、逆に南部の特産品もホネドを通して中部に運ばれる。人々の交易の要所であり、そのために発展を遂げてきた街だ。

そのような背景のある街に正午過ぎ、一人の男と一人の少女がはってきた。風貌から旅人と予想できる。

男は赤い髪と精悍な顔つきが目立つ。

少女は長い金髪と端正な小顔が目を引く。

美男美女に属しているためか、あたりの人々から好奇の視線が旅人達に集まる。

だが違う反応をみせたものもいた。近くの建物の屋根に手持無沙汰そうにぼんやり座っていた少年がその旅人達、特に男のほうを見た瞬間、目の色を変え飛び降りきた。

「シンヒー。」

嬉しそうな少年の馬鹿でかい声に、旅人達がそれぞれ異なった反応をする。少女は不審気に近づいてくる少年を見つめ、シンと呼ばれた男のまづはよむ、と笑顔で軽く手を擧げる。

「久しぶりだな、おい。元気にしてたか？」

笑顔で少年は拳を突き出し、答える。

「見ての通りぴんぴんしている。そーゆーあんたは？」

男も拳を前に出し、一人は挨拶とばかりに互いの拳をガシッと軽くぶつけ合つた。

「それじゃ見ての通りだ。有り余つた体力を何に使うかがいつも俺を悩ませる」

男はふてぶてしい笑みを浮かべる。

「何いつてんだか。相変らすの減らはず口」

「おまえと似たり寄つたりだろ」

一人は笑う。

それから少年はシンの横にいる人物に目を向ける。視線に気づいた少女ははずっと後ずさりしてシンの後ろに隠れてしまつた。

「ああ、こいつの紹介がまだだつたな。こいつはリノン。ちつとばかり顔見知りが激しいところがあるが、悪気はないんだ。ゆるしてやつてくれ」

ポンッとシンの手を頭に載せられ、リノンは顔を赤らめた。リノンはシンの言つた通り恥ずかしいのだろうか、言葉の代わりに軽い一礼をあいさつとして少年に送る。

その仕草があまりに可憐だつたのでそれだけでも気をよくした少年は、しまりのない笑顔で顔を崩した。そして慌てて自己紹介。

「あ、おれの名はニールレイ・ニールニア。この複雑な街の頼れる案内屋だ。ニールって呼んでくれ」

リノンはそう名乗るニールを改めてみる。黒い髪に勝気な瞳。活潑そうな少年だということが一目でわかりそうな雰囲気を持っている。

そんな第一印象を受けて「」と、ニルは突然何を思つたのか血相かえてシンのほうを見た。

「まさか、シン、大人の女じゅう手が出せないつていつんで、年下に田をつけて心が真っ白なうつに自分好みにしづやおつって」

「あほ」

「」と鋭い音がした。

「ひつひつひつ」

あまりの痛さに殴られた箇所である頭を押さえてその場にひざくまる。相当痛かったのか目に涙をためて「」。

「なぐんなくつてもいいじゃんか」

「上田づかいに抗議しても、

「馬鹿なことをこいつからだ」

とシンはいに放つ。

「それより、ほら仕事。イオットーーとそれ弾をできるだけ。待ち合わせの場所として安くてもうまい飯屋を先に案内してくれ。毎過ぎだしな、腹が減った」

上着の内ポケットの中から金貨を一枚とじだして放り投げる。そのまま金貨をしかめつ面でニールは受け取った。

「わかったよ。でもなんでまた同じリフレクなんか買つんだよ。こわれたのか？」

「いんや。前のまじでくれたんだ。おれより腕はいい」

シンが皿慢げにリノンの肩に手を置く。ほめられたために再びリノンの顔に赤みがさしている。

リフレクとは、反晶石という不思議な石を利用した武器の総称だ。反晶石の種類によって、性質も異なつており一概になにとは言えないが、多くの反晶石が属している内包型と言われる分類の反晶石では、自然界の何らかの現象を起こすことができる。それを武器に生かしているのが、リフレクと呼ばれる。

例にあげると、火を生む赤色の反晶石を使って炎を纏う剣といったブレイドタイプのリフレクを作ることもできる。創意工夫でどんな武器も創ることが可能だ。

イオットはガンタイプのリフレクで、衝撃を圧縮して打ち出せる。非力な者でも関係なく威力を發揮するので扱いやすい上に新しいタイプのリフレクなので、たださえリフレク全般はすごいぶん高価なものでおいそれと手を出せないしろものだ。

「シンよつうまいなんて本当につまいんだな。すうじいじゃんかつ」
ニルは感心している。

「だろ? けどそうなるとおれの分がない。リフレクは高価だが旅人一人に一つはあつたほうがいいからな。だから頼むぞ」

「まかせろーじゃあ、遅れずについてこいよな」

ニルはそう言つと返事もきかず、どんどんと街の中に入つてしまつた。ついでにこうとしたシンの袖をリノンは掴んだ。

「ん? どうした?」

「あの人は信用できるですか？」

シンは力強く頷く。

「ああ。少し生意氣だが悪こやつじやなこし、むじりこいやつだ」

「どうやって知りあつたですか？」

意外な問いにシンは不思議に思ひ。

「気になるのか？」

「はい、どうやってシンさんとあつたのかなって」

ダメですか？」とリノンの口が訴えかけてくる。どうしたもんかと迷つた末、答えることにしたシンは口を開き、控えめな声で言ひ。

「はじめてこの街に来た時に、あいつがチンピラにからまわれていたのを偶然見つめたのが最初の出会いだったな

「それでシンさんが助けたんですね。さすがです」

話の落ちを勝手に推測したリノンは、あらん限りの尊敬をこめた瞳で見つめた。シンが気まずそうに外す。

「…………いや、実は俺が助けのはチンペラのほうで…………死にそうだったのはそっちだつたし」

「え？ 今何かぼそつといいましたか？」

もう一度言葉を聞いたリノンは耳をすます。が、シンはその話題を流した。

「いや、まつ、ともかくあいつは信用できるから、困った時、俺がいなかつたらあいつを頼れよ。いいな？」

「私はいつもシンさんのお側にいるから、そんな事態ありません」

心外だといつよくな少しずねた言い方でリノンは答えた。

「つじお前じつ。いい加減ついて来いよー」

依然として後を追つて来ないシン達に遠くから一ルが叫んだ。

「ふ、食つた食つた」

シンは満腹感に浸り、一息ついた。目の前のテーブルには空になつた皿が何枚もある。

「うまかつたな、リノン。ニルの紹介した店、なかなかだろ?」

シンは上機嫌に「トップに入った安いぶどう酒をあおぐ。

「はい。とてもおいしかったです」

向かい側に座るリノンも笑顔で返す。

場所は喧噪でさわがしい食堂。街の南西部は工業区であり、この食堂はその近くに建てられ、労働者達が休息の場所として愛されている。こういった店は他にいくつもあるが特にここは値段良し、味良しと人気のある食堂だ。時間が時間なので店内は客でこんでいたが、ニルはここでは顔が利くらしく店主の男に「三三三」とだけで、シンたちのために席をつくつてもらつた。

「そういえばシンさん。ここに来た目的は「一つあるつていつてましたけど、ひとつは武器の調達で、もう一つはなんですか?着いたら教えてくれるって言つてしましましたけど」

「ん? ああ」

テーブルにコップを置くと、シンはどこか彼方のほうを見つめて

懐かしげに、

「旧友に会いに来たんだ」

「旧友、ですか？」

「そ、旧友。ガキのころ、一番付き合っていたやつで将来の夢なんかも語り合つたぞ。俺は世界一強くなる、あいつはどこか適当な街の支配者になるなんてな」

「素敵なお話ですね」

リノンはえらべうつとつした顔をしてるので、シンは少し焦つて、

「割とつづじみ所じやなかつたか、今の？」

と言つた。

「でもまあ、要は俺達は上を目標そいつていう野心的な性格が互いにあつたから性にあつていたんだろうな。何かしらにつけては競争していた。当然いつも俺が勝つていたけど。名前はラトフっていうんだ。前の街でこここの統治者がラトフってやつに変わつたつて噂をきいて、もしかしたらなんて思つてな。あくまで噂で確証がなかつたんだがさつきールに聞いたら噂は本当だつた」

「どんな人だつたんですか？そのラトフさんは

「なんだ興味があるのか」

意外そうなシンに、リノンは力強く頷いて見せた。

「はい。シンさんが昔どんな人と付き合っていたのか興味があります」

「……なるほど」

「どうかしました?」

「いや、何でもない。……ラトフの性格はな、そうだな……長らく雨が降つて使つていらない小屋から湧いた黴みたいなじめじめした性格だったな」

「破滅的に暗い性格だったんですね」

「毒舌に毒舌とは言つようになつたな……」

「ダメ、でしたか?」

恐る恐る上目づかいでシンを見つめる。最初は驚きはしたもの、一笑して、

「ハハハッ。いや、それだけ変わってくれたってことだ。嬉しい変化だな。初めて会つたときなんか世の中に意味なんかねえぞみたいな顔して無関心無反応だったからな」

「……」

リノンは嬉しいのやら恥ずかしいのやら頬を赤らめ、俯く。

と、そんなとこ。

食堂のドアが開く音がして、二ルが現れた。部屋の隅にあるシン達のいるテーブルに手を振りながらやつてくる。

「おまたせ。依頼通り、持つてきたぞ」

テーブルに布袋を置いて、椅子に座った。

「いやー、交渉人の親父との一進一退の駆け引き。是非見せてやりたかったよ。あの金額でこれだけ買えるのはオレを含めて十人くらいかな」

「あなただけでないんですね」

「いいつつじみだ、リノン」

二ルの持つてきた袋の中身を物品しながらシンは言つ。中身を確認したシンは感心したふうに頷いた。

「さすがだな、二ル。いい腕だ」

「へへつ、だる」

二ルは得意そうにしている。

「ついでにもうひとつ頼みたいことがあるんだが……いいか?」

「水臭いなあ。オレとシンのなかじやないか。もちろん金は取るけど」

「わかってる。リノンちょっとこじりでまつてくれ。俺とニールは二人だけで話がある」

「…………はい」

不満そうな不安そうな表情を隠そつとせずリノンは首を縦に動かす。

そんなリノンを尻目に、ニールはシンの後について食堂の外に出た。面している狭い路地には人がまばらに行き交っている。

「シン、あの子も話に入れてやれよ。悲しそうな顔をしてたぜ」

頭の後ろで手を組みニールはシンの背中に向かって口を尖らせる。振り返ったシンは何も言わず改まった表情でニールに近づく。

「何だよ、シンっまさかおまえ女はあきらめてついにそっちの方向へ」

「馬鹿野郎」

言葉と共に「ん」と鈍い音。先ほどより威力は軽減していためうずくまるほどではなかつたが、頭をさすつて抗議の意を唱える。

「いたいじゃんかっ本田一 度目ー」

「勝手なことばかりぬかすからだ。俺はリノンに聞かれないようこしたいんだよ」

「聞かれちゃ ままずいのか？」

「ああ。なにしろあいつについてだからな。……唐突だがお前はあいつを見ていてどうこの印象を持った？おかしな質問とは思うが正直に答えてくれ」

その質問の理由を先に聞きたがつたが、シンに急かされニールはリノンについて思考を巡らす。

「どうして、そうだな……可愛くて恥ずかしがりやなところがまたいいね。好みのタイプかな」

そう答へても、シンは納得のいかのそつた顔をしてくる。

「もつと他にはないか？些細なことでもいい。頼む」

そう言われてもつと一度考え込む。シンはニールからの言葉を辛抱強く待っている。

「やつこえば……」

「やつこえば、何だ？」

ニールの閃きけている言葉にシンはくいつこひきた。

「オレがリノンを見ると、いつもシンのまつを見てる気がするんだよな。オレのまつなんかほとんど見てなかつたようだし」

嫉妬混じりにシンを見る。

「やつぱりか…………」

少し俯き、考えるシン。

「一体何がどうしたんだよ。説明してくれよ、シン」

教えてくれないシンを今度はニールが急かした。ニールの不満な気持ちが届いたのか、シンはニールを見た。

一瞬探るように目を細めたが、それから再び目を細めた時はなぜか笑顔のためだった。

「なあ、ニール。今から俺はちょっと出かなきゃいけない。しかも一人でだ。だがリノンのことも心配だ。そこで考えた末、お前がその間リノンと一緒にいてくれないか?」

「いいのか?」

ニールの顔が輝いた。さつきまでの不満が微塵もない。

「ああ、お前みたいに人に好かれそうなやつが適任だ。というかおまえしかいない」

シンがほめちぎり、なおさらその気になるニール。

「問題の報酬のほうだがな

」

「いいつていいつて。オレとシンの仲じやないか

ニールが笑顔で制した。先ほどといつていることが違う。

「じゃ、頼んだぞ。夕方にはここに戻つてくる。くれぐれも茹でぬ
えの過ちのな」ようこ「元」

「おう。大船に乗つたつもりでいてくれ！」

別れの挨拶とばかり互いの拳を軽くぶつけ合ひ、シンのほうは曲
り角の向こうに消えていく。見えなくなるまでニールは大きく手を振
つた。

「さてと。どうすれば親しくなるのかな」と

小躍りでもしそうな気分でステップしながら食堂内に戻つた。

ドアを開けた際、隅にいるリノンと視線がかちあつたが、すぐに外
された。今は俯き、膝の上で重ねている両手を見ている。だが内心
の喜びを表にまで出しているニールは全く気付いていない。ニコニコ
顔でリノンの隣の席に座つた。早速声をかける。

「リノンってどこの出身？髪の色からして大陸の人かな？」

興味津津で聞くニールにリノンは俯きながら簡潔に答える。

「そうです」

「どこに住んでいたの？」

「レシンという村です」

「へえ、どんな村？」

「普通の村です」

話が続かない。相手が話をしようとすると気が皆無のようだ。もつと相手が興味の持つものはないかと思案した末に、

「わざわざここまでシンと一緒に旅をしてくるんだ？」

シンという言葉を聞いた途端に、顔こそ揚げなかつたものの、目がわざかに見開く。そして、

「親に捨てられていた私をシンさんが助けてくれたんです。シンさんのおかげで私のいきることができているんです」

急に流暢に話し始めた。シンがどれほどいい人なのか誰かに聞いてもらいたいそ�だつた。期待通り、いや予想以上だつた。できれば外れてもよかつたのに、とニルは若干肩を落とした。

「……シンのことがホントに好きなんだ」

「……はい」

頬を朱色に染めて、恥ずかしげりながらも小さくはつきりと頷いた。

本当にシンにしか興味がないようだ。勝ち田がないのかも知れない。しかしここで諦めるニルではない。シンに依頼されたことを遂行しながら少しづつ距離を縮めていけばいい。

「あのや、オレ、君にこの街を案内したいんだけどいい？」

リノンの顔が照れからあつとこつ間に怪訝な表情に早変わりした。ニルはリノンの警戒心を解こうと言葉を続ける。

「別にやましい気持ちはなきにしもあらずといつかそれはまあおいて、シンが一人でどこか行くらしくて、その間に君の面倒を見てくれつて頼まれて、だから暇つぶしに街の案内でもつて、おい」

ニルの説明の途中、突然立ち上がり、リノンは外へと飛び出て行つた。慌ててニルは追いかける。ニルが食堂を出ると、リノンが切羽詰まつた顔で辺りを見回していた。視界をどこに切り替えてもシンの姿は映らない。

泣きそうな顔をしてリノンはニルに迫る。

「シンさんがどこに行つたのか知りませんかー!?」

「いや、聞かなかつたけど」

切実な問いに若干氣圧されながら首を振ると、リノンは深くうなだれた。

「……シンさん」

小さく開いたリノンの口から漏れ出す声をニルは聞き取る。

「」の子ひとつでシンは必要不可欠なんだ、と思わざるをえなかつた。

第一目標であつたリノンと親密になるところ目標が降下し、リノンをシンに一刻も早く再会させるという目標が一位になつた。別にあきらめたわけじゃないが、今はシンに会わせることがこの子のためだ。

「オレが何とかしてシンに会わせてやるよ」

ニルがそう言つてリノンが反応するまで、一、二、三秒ようじた。

「……本当、ですか？」

すがるようになつめてくるリノン。ニルは笑顔で頷いた。

「もつちゅうご。だつてオレはほんの街を知りぬくしている街の案内屋だぜ？情報網それなりにあるしさ、まかさせてくれよ」

シン早く会いたいといつ気持ちと、シン以外の人に頼るといつ抵抗感。どちらの答えを出すのかを歎み、しばしの沈黙。そして、

「よろしく、お願いします」

とニルを頼つた。

ニルは嬉しかと同時にこの期待に必ず応えようとやる気が満ちていく。

「まずは情報収集か。そういうのにかがめつゝやつ何人か知つていいからそこから手を打つてみるか」

動き出したニールの後をついて行くリノン。先ほどは困惑したがするべきことがはつきりしたおかげで、今はよつやく少し落ち着いて物事を考えられるようになつた。するとすぐシンが話していたこの街に来た目的を思い出す。

「旧友に会いに来たんだ。

「あ、あの」

「ん? 何? リノン」

初めてリノンのほうから話しかけてきた。少し驚きながら振り返る。

「シンさんが言つていました。この街によつた理由の一つにラトフさんという人に会いにきたのだと。もしかしたらシンさんはその人に会いにいったのかもしれません」

「……あのラトフと知り合ひなのかよ、シンは」

ニールは苦い表情を浮かべる。

「手掛けかりを得たのはいいけど、どうしたもんか……」

「危険なんですか?」

リノンは心配で高鳴りする胸を押さえ、不安げに聞いた。

「これはまたえらく豪勢な屋敷なことで」

高価で重厚そうな絨毯を踏みながら、シンは廊下を彩る数々の装飾品に目を奪っていた。

どうして金持ちはわざわざ無駄に高いもんを買うんだろ？ これが傷つけたらいくらくらい弁償するのだろう？ と、庶民感覚で置かれている高級そうな絵画などを踏みをする。

シンは今、この街の統治者であるラトフの屋敷にいた。ホネドの北西部は、大商人など裕福な層の住みかとなっている。高級住宅が立ち並ぶその中の一際豪奢な建物がこの街の統治者たるラトフの屋敷だった。

最初この屋敷に入るうとしたが、執事に事前に会う約束を取り付けていないと会えない、また素情がわからないものなら尚更と冷たく断られた。そこでシンが自分の名をラトフに伝えるだけ伝えてほしいと頼み、執事がその旨を主に伝えると慌てて戻ってきて主が会いたいと今ラトフの書斎にまで案内をされている。

相手がシンを知っているということはつまり、ラトフはシンの知っている幼馴染みのラトフということになる。

先導していた執事が一つの部屋の前で足を止めた。

「いらっしゃいます。では」

執事はそう言って一礼をし、立ち去った。

シンは田の前にあるドアノブをゆっくり回し、引く。中に入ると一人の男が部屋の奥で椅子に座り、待ち構えていた。笑みを浮かべ、机に肘を置いて頬杖をついている。

「お前、本当にラトフか？」

驚き顔のシンの問いに、男は頷く。

痩身な体型は変わらない。顔の輪郭にも昔の面影が残っている。しかし身にまとっている空気が完全に別人だった。瞳は自信でギラギラ輝いている。リノンに言っていたように過去のラトフは暗い性格だったのだが今のラトフの性格は外に向かっていた。最初ラトフが街の統治者と聞いて務まるのかと半信半疑だったが、今なら頷ける。

ラトフはシンの反応を楽しんだ後に、ひと先ず座れば、と向かいのソファーを勧めた。シンはそれに従い、ふかふかのソファーに腰を沈めると、棚からワイン瓶とグラスを一つ取つているラトフが声をかけてきた。

「よく来ててくれたね。ずっと会いたいと思っていたんだ」

歓迎の意を示しているのだが、優越感も混じつっていた。

「俺もそう思つてから会いに来たんだ」

ラトフの態度に気にせず、シンは室内の高級な調度品に舌を巻く。

「そしたらこの有り様だ。あくどことの一つや二つやつたのか？」

からかい半分で言うと、ラトフは苦笑いをつかながら、

「まさか。苦労に苦労を、幸運に幸運を重ねてようやくこの地位を手にいれたんだよ。頭脳を頼りに前にここを治めていた人にとりいつてもらつてね。そこからこいつこいつと頑張つたのさ」

ラトフはワイン瓶から黒褐色の液体をグラスに注ぎ、シンに手渡す。そして自分のグラスの分も注ぐとシンとテーブルを挟んだソファーに座り、グラスを持っている手を突き出す。

「君はあれかい？ 未だにリアリルを？」

刹那、シンが陰のある面持ちを見せた。が、すぐに引っ込め、気を取り直すように軽口を叩く。

「ああ。全くどじまつつき歩いてるんだよ、あいつは。探すほうの身にもなれつづの。ともかく乾杯」

「乾杯、シン」

シンは乾杯にしては少し乱暴に自分のグラスをラトフのグラスに当て、一気に飲み干した。対照的にラトフは味わいながら飲んでいる。その優雅な振る舞いに改めてシンは変化を感じる。

「ガキの頃は欲の強いくせに根暗で、自己主張の欠けていたのにな。どういった心境の変化だ？」

ラトフの額がぴくりと動いた。しかし表情は依然笑顔のままでいる。グラスをテーブルに置いてから一言。

「僕も昔話をひとついいかな？」

「そりやつて断る必要もないんじゃないのか」

自分でグラスにワインをつぎ、シンは一杯目にかかぶりとしていた。

「僕は昔から君が嫌いだった」

グラスがシンの口に達する前に止まつた。

笑顔でラトフは話を続ける。けして心からの笑顔ではなく、仮面のようすに無機質で冷たい笑みのまま。

「いつも君との遊びは君の得意分野からの遊びだったね。知的なことが一切かかわっていない体力的な遊び。だから勝負すればいつも僕が負けた。負け続けた。そのたびに君は、なにやってるんだっていってたよね。屈辱的だったよ」

「遊びで頭を悩ませてどうする？楽しむためのものだら、遊びってのは？」

言外にお前は馬鹿か、という含みを持たせどどめどばかりにふてぶてしい笑みを送つた。ラトフの表情が凍りつき、仮面がはがれたようすに潜めていた憎悪の素顔をむきだしになる。

「そう、その顔だよ！その顔が瘤に障るんだー君が邪魔なんだ。無力だった忌々しい人間時代を思い出せぬ」

そこまで喋るとラトフは内面を吐露したことを恥じているのが、そこでいつたん口をつぐんだ。代わりにシンが感情を表に出さず口を開く。

「その様子じゃ、どうやらあの噂は本当なんだな……今の地位に就くために邪魔ものを裏で皆殺しにしたってやつだ」

それはニルから聞いた話だつた。そのときはありえないことだと鼻で笑つたが、今のラトフの様子では急激に真実性を帯びてしまつ。

「ああ、そのことか。本当のことだよ」

「とも何氣にこたえてきた。

「特別にどうやつたか見せてあげるよ」

立ち上がり、右手をシンにむかつて真っ直ぐ突き出す。男にしては華奢な手。まるで武器を一度も振つたことがないようで、人を殺すには非力。

そう第一印象を受けた瞬間、まるで至近距離で額にナイフでも突きつけられたような危機感が過つた。反射的にシンは横に飛ぶ。置き去りにされたグラスが宙に漂い、後からソファーの上に落ちて、中身をぶちまける。

「いい反応だね。そのまままほつとしていたらあの世に逝つていたよ

ラトフは依然右手を突き出したまま固まり、態勢を整えたシンに今度は心底愉快そうな笑みを送る。

自分が殺されそうになっていたのはわかつた。だが具体的にどんな手段で行われたのかが今一つ理解できない。状況を読み取ろうと周囲に目を配らせ、そこでラトフの右手の延長線上にある壁に小さな穴が空いているのに気づいた。なんだ、あれは？新しいタイプのリフレクでやつたのか？聞いたことがない。それとも……

「お前……憑一者だつたのか？」

確かめるように発した問いは、ラトフを尚更喜ばした。

「そう。いい言葉だよね、それ。僕は選ばれた。つよくなつたんだよ。無力な人間でも適格していない憑き者でもない。進化したんだ。今のだつて僕の中のアーブスを指先から不可視に鋭利に表出させてみたのれ」

「まるでガキが新しいおもちゃでももつたみたいはしゃぎょうだな」

シンは馬鹿にしたような笑みを浮かべつつも、それってよけるのきつくねと内心冷や冷やだつた。それを見抜いているのか、ラトフも余裕を崩さない。

先手必勝とばかりにシンは腰のホルスターからイオットを抜き、数発放つた。

イオットは衝撃を発生させる灰色の反晶石を使って、衝撃に指向性を持たせることにしたリフレクだ。腹部に食らえばじばらく悶絶する程度に作られている。

しかし、

「そんなものも効かないよ」

ラトフはシンに向かつてただ右手を前に差し出しただけで、ラトフに届く前に衝撃が何かにぶつかった音をたてて四散した。その際、ラトフの右手を中心に半円状で半透明な何かが展開しているのが一瞬姿を見せた。さつきは攻撃に、今度は防御にアーブスを使ったのだろうか。

「ちつ」

初っ端から打つ手なしのこの状況。相手が反則にもほどがある。舌打ちせずにはいられない。戦つより戦略的撤退をしたほうがいい。

「そういうば、僕の噂が流れているようだけど、有名度なら君のほうが高いんじやないのかな？破天荒な性格のせいもあるけど、やっぱりアーブスにつかれていない人間っていうのは珍しいんだね。でも、だから弱いんだよ」

最後の一言の語氣が強まつた。ラトフの声に潜む暗い殺意を察して本能が危険と警鐘を鳴らした。弾かれるようにシンはその場から離れる。

瞬間、シンはラトフの指先から限りなく透明な水色が突出し横切るのを目に映つた。

シンの元いた場所の後方にあつた窓に小さな点が開く。びりやうこれが先ほどと同じアーブスを使った攻撃のようだ。よけたシンは、この場にいても状況は不利と、ラトフの書斎が三階に位置すると知

りながらそのまま躊躇なく窓に突っ込んだ。盛大な音をたてて、窓ガラスが割れシンは姿を消した。

「おしい」

ラトフがそのまま立っていると、すぐに執事が何事かと駆けつけてきた。

「どうかいたしましたか？」

「先ほどの客人が命を奪おうと僕を襲つたが失敗し逃げた。追え」「かしこまりました」

礼をむせここに、執事は書斎から出ていく。

「さて僕も行くか」

口元を歪ませて、ラトフも窓から飛び降りた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1521h/>

ニルレイ

2010年10月15日21時18分発行